

21 世紀世界をつかむ
——社会学の思考力——

2004 年度上村ゼミ（基礎演習・演習 1）論文集

法政大学社会学部

はしがき

経済学者のハロッド (Roy Forbes Harrod、1900-1978。ケインズ理論の動学化に貢献した) は『社会科学とは何か』(清水幾太郎訳、岩波新書、1975年。原題は *Sociology, Morals and Mystery*) という本のなかで、ある種の社会学を痛罵している。彼によれば、社会学はじゅうぶんに成熟した科学とは言えないので、大学の教科目に加えるべきではないという。そもそも教育の目的は、学生に「分析、精密、正確、特に客観性、そういう力を備えた精神を与えて、外部の生活へ送り出す」(196頁) ことにある。ところが、現在の社会学は非常にあいまいなものである。大学生の思考力の訓練には役立たないというのである。

ここで、ハロッドの社会学批判をすべて真に受ける気はない。社会学が全くの言葉遊びに終始しているなどという批判は、とうてい受け容れがたい。ただ、大学教師の仕事は煩瑣な用語体系を教え込むことではなく、「学生の思考力、表現力、研究方法を鍛えること」(12頁) だという彼の主張は傾聴に値する。これは彼が一生を過ごしたオックスフォードの専売特許ではなくて、わが法政大学社会学部でも実現すべきことに違いない。そして、ハロッドと違って私は、社会学こそ、この目的にかなう学科だと信じる。

21世紀における「外部の生活」は、ハロッドの時代にも増して複雑で対立に満ちたものになっている。そうした世界においては、まず浮世離れた古典や哲学や歴史を学んで頭を鍛え、大学卒業後によりやく現実社会に向き合う、といったハロッド流の教育では間に合わない。学生は、複雑で対立に満ちた現実社会に最初から取り組むべきである。ただしそのなかで、複雑さやイデオロギーにむやみに振り回されないだけの、思考力や研究方法を身につけるよう促されるべきだと考える。

「社会学の思考力」とは、ハロッドに対する同感と反論の両方を含んだ表現だが、そこにおおよそ以上のような意味を込めたつもりである。この論文集は、2004年度の基礎演習(1年生)と演習1(2年生、第3章担当)の学年末レポートを編集したものである。私にとって初めての演習指導だったので、学生の思考力や研究方法をうまく鍛えることに成功したかどうかは大いに怪しい。しかし一方、初年度の若気のいたりで論文集を刊行することになり、学生の表現力についてはかなりの時間をかけて添削指導するはめになった。この点、ゼミ生諸君は不慣れな教師に当たったことを幸運に思うべきなのである。

2005年5月27日

上村 泰裕

「21世紀世界をつかむ——社会学の思考力」目次

第1章 家族——専業主婦は生き残るか

1. 性別役割分業意識の変化と専業主婦の未来（鈴木敦子） 1
2. 専業主婦の今と昔（小松聖深） 7
3. 専業主婦の国際比較（森亮輔） 12
4. 男性の育児参加（太田充彦） 17

第2章 仕事——会社とどう付き合うか

1. 正社員と非正社員の意義——新たな非正社員の立場から考える（加藤百合子） 19
2. 日本のパート雇用をどのように発展させるか（垂井和子） 25
3. 日本の就職事情——就職難なのに労働力不足なのはなぜか（伊藤奈月） 32

第3章 福祉——地域に根ざしたサービスとは何か

1. 東京都の保育サービスのレベルアップ（酒井原拓子） 41
2. 東京都の障害児教育の現状と特別支援教育（高杉あかり） 50
3. 島根県の介護系NPOの問題点（飯島誠） 60
4. 地域による高齢者介護政策の違い——武蔵野と佐渡の比較から考える（坂崎友幸） 63

第4章 環境——炭素税は地球を救うか

1. 温暖化防止対策——私たちにできることは何か（内山侑香里） 73
2. 英国の排出権取引制度とその問題点（藤伸行） 79

第5章 韓国——隣国の現在をどう理解するか

1. 国産映画振興への道——韓国と日本の相違点からの検証（千葉佐與子） 84
2. 日米韓の対北朝鮮政策の比較——日本のとるべき政策は何か（山下範之） 91

第6章 戦争——記憶の交流は可能なのか

1. 戦争博物館は何を伝えるのか——博物館の提示する物語（井上和宏） 95
2. 歴史認識の違い——国際教科書対話による歴史理解の共有（高橋章一） 101
3. テロはコーランとどのように食い違っているか（三日市圭介） 106

21 世紀世界をつかむ——社会学の思考力
2004 年度上村ゼミ（基礎演習・演習 1）論文集

2005 年 5 月 31 日 印刷・発行
法政大学社会学部 上村泰裕研究室
194-0298 東京都町田市相原町 4342